京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十七卷　第四・五號

リカアドウの論理構造……行澤健三

ヨークシヤー・ラツダイトに就いて（二）……穗積文雄

嗜好の變化と價格の變動……市村眞一

森耕二郎教授著『社會政策要論』（新版）……岸本英太郎

河野健二著『絕對主義の構造』……後藤靖

昭和二十六年五月

ヨークシャー・ラッダイトに就て（二）

穂積文雄

はしがき
一、發生　前號
二、組織　前號
三、行動　本號
四、影響　本號
五、終熄　本號
六、批判　本號

三　行動

われわれは、以上において、ラッダイトが、いかにしておこり、いかになりたつたか、ことばをかえていえば、ラッダイトの發生の原因・過程およびその組織をみた。それでは、かく發生し、組織せられたラッダイトは、い

かなることをしたか、他のことばをもつていえば、それはいかなる行動をとつたか。われわれは、これより、しばらく、それをながめるであろう。

ラッダイトの目的が、當時、困窮眼をおおわしむるものがあつた庶民、とくに勞働者がその悲慘なる境涯よりのがれ出でんとするにあることは、すでにわれわれのみたるところよりしてあきらかなるところである。しかるに、かれらは、その困窮は機械の使用よりきたるところ大であるとみた。そこで、かれらは機械に對して反抗をこころみることになつた。そして、それは、主として、機械破壞としてあらはれるにいたつた。そのことはまた、すでに述べたるところよりしてあきらかであろうとおもう。しかしながら、機械えの反抗は、もと、かならずしも、機械の破壞のかたちをとらなければならないというわけのものではない。あえて機械を破壞しないでも、機械の使用を抑止することができれば、それでよいはずである。そして、それには、法律によつて機械の使用を禁止してもらうか、または、製造業者をして機械の採用をおもひとどまらしむるかの二つのみちがありうる。げんに、まえの場合は、これまで、しばしば、おこなわれてきたところである。[1] しかし、このころになると、當局の考えは變化している。機械の使用は國富を增す所以であり、國家の利益に一致する、また、國民が自己の利益を追求することは法に反せざるかぎり正當なる權利の行使であるというふうに考えられた。[2] そこで、かかる禁止はもはやのぞみうべくもなくなつたのである。[3] それでは、あとの場合はどうか。もちろん、ラッダイトは、それですめばそれにこしたことはない、と考えていた。すくなくとも、そう考えているといつている。ただ、それはむずかしい。難中の難事である。それで、それを成功にみちびくためには集團の威力・壓力によらねばならぬとしただけである。そのことは、さきにみた、ラッダイトの目的にもあきらかにあらわれている。また、これもさき

に引いた、勞働者が製造業者に對して機械採用の延期を申込んでいることにおいてもみることができるところである。しかしながら、それでも、製造業者は、それに耳をかすには、あまりに利益の損求に急であつた。あまりに機械の利益に魅せられていた。そこで、ラッダイトとしては最後の手段であるところの、すくなくとも、かれらがそういつていたところの、機械の破壞がおこなはれざるをえぬこととなる。

かくて、一八一二年二月の後半に入ると、ハッダースフイールド地區の小規模な工場の機械破壞がはじまるをみる。スニップシャー將軍（General Snipsher）とその部下となのる連中が、まず警告狀を工場に發して、機械を撤去せねば機械だけでなく家も破壞する旨を告げ、反抗するものはこれをしばりあげて、破壞を實行した。かくて、切毳機や布地が破壞せられた。三月一五日、ハッダースフイールドの奉行、ラードクリッフ氏（Mr. joseph Radcliffe）は一一軒の被害を報告している。三月一五日にはハッダースフイールド附近のテーラー・ヒル（Taylor Hill）のヴイツカーマン氏（Mr. Vickerman）の工場で、機械十臺、切毳機三十對が破壞せられ、三月二四日にはリーヅ近傍のロードン（Rawdon）のトンプスン工場（Messers Thompson's mill）が襲擊を受け、機械が破壞せられ、その翌日はリーヅにおけるデイツキンソン氏の家（Messers Dickinson's Premises）が押入られ、布地がズタズタに切られた。ついに、ホルベリー（Horbury）の奉行の一人は、工場に、機械撤去を勸告した。これに應じたものもあつたが、ホルベリーの大工場主ジョセフ・フオスター氏（Mr. Joseph Foster）はこの勸告を拒否した。すると四月九日、工場は、襲擊を受け、機械は破壞せられ、襲擊者は仕事を終えてから、家人に『おやすみ』といつて歸つて行つた。かくてつひに、四月一一日リバースエッヂのローフオルド（Rawfolds in Liversedge）におけるカートライト氏（Mr. William Cartwright）の工場襲擊においてクライマツクスに達する。[4]

それでは、工場の襲撃・機械の破壊はいかにおこなわれたものであろうか。

それはだいたい、つぎのごとくおこなわれたもののようである。

まず、かれらは、夜の集會において、計畫をたて、まず、攻撃の目標がきめられる。この場合、もつとも不人氣な製造業者がやりだまにあがることは容易に想像しうるところのごとくである。[5] ときに、それが二名あり、容易に決しがたい場合には、うらないの方法によつた場合もある。[6] ついで、集合の時間と場所がさだめられる。たいてい、夜、めだたぬところがえらばれることはいうまでもあるまい。かくて計畫がたつと、集會に出なかつたものにはそれぞれ連絡がとられる。さて、いよいよ、その日、その時刻になると、團員は、三々伍々所定の集合所にあつまる。かれらは、顏にすみをぬり、あるいは覆面をして變裝をしたものである。[7] 女裝さえおこなわれたことがあることは、さきに引用したところによつて知りうるがごとくである。かれらはそれぞれ、武器をもつて身をかためていた。武器としては、銃・ピストル・ハンマー、が主で、それらのないものは、棒ぎれ、その他なんでも、とにかく、武器として使用できるものを手にしていた。[8] いよいよ、攻撃となれば投石もおこなわれたものである。[9] 銃やピストルは、後に述べるごとく、この目的のために、強奪までしている。[10] ハンマーは、かれらは、これをエノック (Enock) と稱していた。[11] さきに引いたクロッパーの歌の中に出てくるエノックはすなわちこれである。その稱呼のおこりは、エノックというものが、このハンマーを製造していたことからきたということである。[12] ところがおもしろいことには、そのハンマーは機械を破壊するための主たる手段であることはいうまでもないところであるが、エノックは一方そのハンマーをつくるとともに、他方そのハンマーで破壊せられる機械をも製造していた。[13]

せいぞろいができると、部署がきまる。第一番隊は銃隊、二番隊はピストル隊、三番隊はエノック隊、それから棒ぎれ隊が、しんがりをつとめる。[14] 總勢はいくたりくらいであつたろうか。かならずしも一定せず、また、はつきりともせぬが、百名をこえるのは普通で、數百名におよぶこともあつたようである。[15] そして、各隊いずれも何列かの縱隊で目標の工場へむけて進擊したらしい。

目標の工場につくと、いよいよ、攻擊がはじまる。攻擊は、まず、銃隊ピストル隊が威嚇射擊をなし、ついで、ハンマー隊が工場におしいつて機械を破壞して目的をはたすという順序になつていたようである。[16]

目的達成後は、また三々伍々と引きあげるわけであるが、時に、夜の集會の場所で酒をのみ、成功をいわつて、さはぐこともあつたらしい。[17]

以上は、だいたいの樣子を述べたのである。個々の具體的な場合には、それぞれ、事情もちがふであろう。みなこのとほりとはきまらない。一概にはいへぬ。それは、いふまでもないところである。そこで、ここに、ベン・オ・ビルの回想錄から一つの具體的な事例をあげておくのも無意味ではあるまい。[18]

ベン・オ・ビルはまず、グレツドホルト（Gledholt）Sなにがしの工場を攻擊した事實を詳細に記述している。ただし、それには、パドツク（Padock）の『ナツグス・ヘツド』（Nag's Head）といふ旗亭に集合して、まず酒を呑んで勢をつけたことをいつているが、人數や隊伍のことは別にいつていない。しかし、攻擊目標に到達してからのことは詳細をきわめている。すなわち、まず、ハンマーでSなにがしの住宅の臺所の戸を破つて難なく侵入し、おそれおののく主人Sなにがし氏と首領株のジョージ・メラーとの間に問答がかわされる。すこし長すぎるきらいがないでもないが、いろいろな事情があきらかとなるとおもわれるから、重要なところをピツク、アツプして

みよう。

——おまへは、あそこの小舎に仕上機（the finishing frames）をもつているだろう、とジョージはいつた。

——ハイ、ハイ、ラッド様。（good Mr. Ludd）ハイ、ハイ、でも、ほんの小さなやつです。

——いく臺？

——一臺、もしかしたら、二臺。

——もつとあるだろう。

——ハイ、三、四臺かも知れません。

——ちかごろ、いくたり解雇したか。

——二、三人。

——もつとだろう。

——ハイ、二十人くらい。

——そして、その人たちはどうしてくらしているか。

——知りません。

——そして、かれらの家族は？

——家内が、われわれの食物があまつたときは、いつでも何かをかれらにやります。

×　×　×

——おまへは警備隊員（the Watch and Ward）の一人だ。おまへの警棒はどこにあるか？

——鏡のそばに鞭や櫛といつしよに。アア、アア

——銃はどこにある？

——居間にあります。

——二〇番、とつてこい。

× × ×

——工場の戸の鍵はどこにある？　とジョージは食事でもするかのごとく冷静につづけた。

——嗚呼、嗚呼、あなたはまさか機械をいためはなさらないでしようね。あれは一臺一五〇ポンドしました。そして、その代金をまだ銀行にはらつていません。

——鍵だ。鍵だ。

そこで、かれは鏡附簞笥から大きな重い鍵をとり出した。

——二二番、二三番、二五番、任務遂行、

……ハンマーが振りおろされ、木と鐵がくだけ、高價な機械が回復のしようのないまでにこはされた。あわれなSなにがし氏は自分の心臓が破れるかのようにうめいた。そして、かれの妻は階段の上で、ハンマーがふりおろされるたびに、さけびごえをあげた。

——ところで、とジョージはピストルをとり出していつた、まだ一つのこつていることがある。ここにバイブルがある。誓約をしろ、今晩いはれたりなされたりしたことに不平をいわない、いへば災害が降りかかる、と。

——はい、ラッド様、誓約します。なんでも誓約しますから、かへつてください。嗚呼、わたくしのあわれな機械よ！　それ

で、もし、今夜の後、わたくしがリューマチで死ななかつたら、それは奇蹟でしよう。

――それから、おまへが解雇した人達を復職させる、と。

――はい、はい。

――それから、正直な人達の口からパンをうばう機械を以後決して設備しない、と。

――決して、決して、いたしません、神よ救いたまへ。嗚呼、かへつてくだされ、ラッド様！

そしてわれわれはかへつた。

右の會話はラッダイトの行動について、いろいろのことをあきらかにしてくれる。まず、ラッダイトは、單に機械を破壞するのみでなく、將來機械を備え付けないことを誓約させたり、解雇せる勞働者を復職させることを命令したりしている。しかし、これは、ラッダイトがもともと、勞働者の窮狀をすくふためにおこつたものであることを知れば、なんらあやしむをもちひぬところといえよう。かくて、われわれは、さらに、また、ラッダイトが、その襲擊に際して、食料品の廉賣をさえ强制している事例をみることができても、すこしも不思議とするにはおよぶまい。[19]

たとえば、一八一二年八月二九日の夜、ラッダイトの一隊が、ハリファックス(Halifax)のちかくのスカーコート(Skircoat)のそばのコプレイ・ゲート(Copley Gate)に住むジョージ・ヘイ(Gorge Haigh)氏の家をおそつたをり、かれらは、そこの主人が附近のものに、ミルクを、一クアート(quart)二ペンスで賣らなければ、また來るであ

ろうといつたことを、そのなかの一人であつたジョセフ・カーター(Joseph Carter)というものが、一八一三年一月一一日、ヨーク城中に開かれたラッダイトの公判において自供している。[19] ヘイ氏の使用人のチロッオン(Tillotson)氏はかれらはかれの主人がミルクを附近のものに安く賣らなければすぐに來て主人を殺してしまうといつたと證言している。[20]

つぎに、ラッダイトは武器、とくに銃器を提供せしめていることを知る。これはまず相手の武器をとりあげしかるのちゆうゆうと安心して行動するためであること、もとより否定すべからざるところであろう。しかし、ラッダイトが銃器を要求したのは、單にその故からのみではない。それは、ラッダイトが、機械破壞のためでなく、銃器の掠奪のみを目的とする行動をしていることによつても、これを知ることができよう。たとえばいま最後に引いたラッダイトがジョージ・ヘイ氏方をおそつた事件において、かれらの目的は、實はもともと武器の强奪にあつたのであつて、ミルクの廉賣の强要はつけ足しにすぎぬとも見られる。それは、かれらがヘイ氏の宅をおそうや、まず『わたしの主人のラッド將軍が、おまえの火器をとりに、わたしをよこした』、とよばわり、ヘイ氏が火器はないとこたえると、『われわれは、おまえが、銃二梃ピストル四梃もつていることを知つている。すぐに、おまえの火器をひきわたさなければ、おし入つてとるであろう。早く、早く、早く。』とせきたてたといふことをジョージ・ヘイ氏がこの事件の審理において證言しているによつてあきらかである。[22] それではそれはなんのためであつたか。それは工場襲擊を容易にするためであつたことはいうまでもないところであろう。しかし、さらにより大なる目的のためでなかつたとも、いへぬかも知れない。さきに見たラッダイトの究極の目的とむすびつけて考えてみるとそうなるであろう。それはともかく、ラッダイトが單に機械破壞のみでなく、銃器の强奪蒐集

をもさかんにおこなつたということは、等閑に付しさることのできぬところでなければならないであろう。

さきにあげた事例ではラッダイトはみごとにその目的を達成している。十二分に達成している。襲撃をうけた製造業者Sなにがしがラッダイトのまえに平身低頭して、その要求に易々諾々たるありさまは、みるも氣の毒なくらいである。そして、それは、また、襲撃をうけた多くの製造業者のすがたを示すものでもあつたのである。いかに、多くの製造業者がラッダイトのまえにふるえあがつたかは、たとえば、ヨークにおけるラッダイトの公判において、裁判官が、かれらのふがいなさを慨し、もしかれらが、ラッダイトに對して毅然として自己の生命財産を防衛するための手段をつくす精神を發揮したならば、今日かかる裁判にわずらわされることはなかつたであろう、という意味このことをいつてをり、[23] また、シャロッテ・ブロンテが、『シャーリ』の中で、モーア氏をして『多くの製造業者は襲撃をうけると、自失してしまうようにみえる』といい、そのさまを形容して、『蛇ににらまれた蛙のようにじつとあきらめた』（…：he gave up as tamely as a rabbit under the jaw of a ferret.）と嘆ぜしめているによつてもこれを知りえよう。[24]

しかしながら、多くの製造業者がそうであつたからといつて、すべての製造業者がそうであつたわけではない。なかには、ラッダイトに對して、自衛手段を講じ、これに對抗せんとした勇敢な製造業者もなかつたわけではない。かかる場合には、必然の結果として、そこに衝突がおこり、激烈な闘争が展開し、ラッダイトが敗退するのやむなきにたちいたる場合も生じた。その典型的なものが、ウイリアム・カートライ（William Cartwright）氏の工場襲撃の場合である。このカートライト氏の工場襲撃事件は、おなじころ、ランカシヤーのウエスト・ホート

ン(West Houghton)にあつたロー・ダンカフト工場(Messrs. Wroe and Duncuft's manufactory)の焼き打ち事件とならべて、當時、『これより大きな暴擧は文明國では見られなかつた』[27]といわれたものであつた。しかも、それだけに、それにおいて、われわれは、ラッダイトの工場襲擊の樣相が一層あきらかになる便宜をもつ。そのうえ、この事件はヨークシャー・ラッダイトの運命に重大な關係をもつことやがてあきらかとなるところのごとくでもある。だから、われわれは、ここで、しばらく、それについて、若干の頁をついやしても、むだにはならないであろう。

カートライト氏はシャロッテ・ブロンテの小說『シャーリー』の中ではホロウス・ミル(Hollows mill)の工場主モーアとなつてあらわれる。モーアのモデルがこのカートライト氏であることはつぎの諸事情よりしてあきらかであろう。一、モーアとカートライト氏とそれぞれにおこるアクシデントが多くの點において符合している。二、一八三一年一月、ようやく十五歲ちかくであつた、ブロンテはロー・ヘッド(Roe Head)のミス・Wなにがしのもとで薰陶をうけることになつた。[26]ここでは土曜日の午後のやすみに附近の野外を散策拔涉するがならいであつた。その地は過去、現在にわたりいくたのものがたりを秘めていた。とりわけラッダイトの中心地であつた。W女史は生徒たちにラッダイトのころのことをいろいろとはなした。カートライト氏の工場の襲擊はラッダイト事件の中でも重要な位置を占めたものであつた。それは、すくなくとも、ブロンテの心にはふかい印象をのこしたにちがいない。[27]三、わたくしの讀んだ『シャーリー』はソーントン版(Thornton Edition)というのであつて、それはイラストレーテッド(illustrated)であるが、そのイラストレーションズ(illustrations)の中にたまたまモーアの肖像と、その襲擊された工場の寫眞がある。しかるに、まえのものにはモーアの名とならべてウイリアム・カートライト

氏の名が記してあり、あとのものには、『ポロース・ミルの原圖』(Original of Hollows mill) という説明がついているが、それは版畫の寫眞であつて、その版畫の中に、ローフオルド・ミルという説明の文字が見えている。そして、これらのことは、編者もモーアのモデルがカートライト氏であることを肯定していることをものがたるものでなければならないであろう。(さしゑ參照)

すでにふれたところのごとく、『シャーリー』は當時の事實をよくとりいれ、人々は事實と小説を混同し、小説によつて事實をはなしたといわれるくらいである。[28] かくて、モーアのモデルがカートライト氏であるとすれば、われわれはモーアによつてカートライト氏をしのぶ便宜をもちうる。――もちろん、小説におけるフイクションを考慮に入れることをわすれてはならないが。――しかし、ここでそれを詳細に引くいとまはない。だから、われわれは、いまのわれわれにとりて重要な點について、よく、かれの片鱗を示すに足るとおもわれる若干のものを引用することで滿足せねばならない。わたくしは、ふたたび、モーアと牧師補マーロンの會話から引用するであらう。

モーアは牧師補マーロンにむかつてつぎのごとくいつている。

――わたくしは、ただ、機械 (machines) が欲しいだけだ。機械 (frames) はここでは安全だ。工場の四壁の中で。ひとたび、そなへつければ、わたくしは、機械破壞者 (framebreaker) をふせぐ、やつこさんたち來てみるがいい、眼にものみせてくれる。わたくしの工場はわたくしの城砦だ。[29]

こう豪語した後かれはさらにことばをつづけて、

――きやつらは、ほかの人達にしたことをわたくしに對してもするであろう。しかし、そこには、一つだけ相異がある。多くの製造業者は襲撃をうけると自失してしまう。たとへば、サイクス（Sykes）氏は、ドレッシング・ショップ（Dressing shop）が、火をかけられ、やけおちたとき、きれ地がほしわく（Tenters）からもぎさかれ、づたづたにして野外にすてられたとき、犯人を發見したり、所罰したりするためにふみ出さなかつた。かれは蛇に見こまれた蛙のごとく、おとなしく、あきらめた。ところが、わたくしはというと、きつと、わたくしの商賣をまもり、わたくしの工場をまもつてみせる。[20]

といふ。そして、かれは、實際、よく、そのことばをまもつた。ヨークシャー城内におけるラッダイトの公判においてパークス氏はつぎのごとく述べている。

『カート・ライト氏―かれのローフオルド・ミル（Rawfolds mill）という工場は四月十一日襲撃をうけた――は、かれがもつとも進歩した機械を使用した理由によりこれらの人々（譯者註―ラッダイトをさす）の中で非難されている、という豫告をうけていた。その豫告の結果、この紳士は四月十一日以前、六週間以上も、家をはなれて工場で寢た。――というのは、かれの住宅はべつのところにあつたから――そして、そればかりでなく、かれは五人の兵士と四人のかれの勞働者の寢床をも用意させた。かれは、用心ぶかい人のまさになすべきごとく、防衛の用意をした。……かれのきづいた工場を破壞することは、精鋭な軍隊のほかは、何人にもほとんど不可能のごとく見えた。……各階に（四階であつたとおもふ）かなりの大きさの敷石が並んでいた。それがおこされて銃眼をつくるように立てかけられた。そこで、もし、何人でもあれ、階下の窓を手斧かまさかりでもつて攻撃する

がごときことがあれば、屋内のものはかれらに彈をあびせることができた。そして、カートライト氏はその目的のために銃と彈丸を用意した[31]』

このような人物の工場がラダイツトの襲撃の對象となるのは、むしろ當然といえよう。けだし、ラツダイトとしては、群小の製造業者の工場をやつつけるよりも、かかる工場をやつけることによりて、一方にはその勢威を示すとともに、他方にはそれら群小製造業者をして風をのぞんで、ラツダイトの要求のまえに屈服せしむることができると考えられるからである。[32]

かくて、ベン・オ・ビルによれば、さきにみた、Sなにがし氏の工場襲撃の夜、その歸途にもつた集會の席上において、四月十一日土曜日の夜をもつてカートライト氏の工場を襲撃すること、そのために、當夜十一時『スリー・ナンス』("Three Nuns") のそばのダム・スチープル (Dumb Steeple) に集合することが決定せられた。

その夜は『半月が飛雲の背後を走つて隱顯し、まるで大浪の中の火の船のごとくであつた。雨はなかつたが風がうなつていた。風のうなり、自分達の足音、まばらな人家のそばをよぎるときの牛のなきごえのほかは萬籟寂としてこえがなかつた。……ダム・スチープルにちかづくほどに、人影のうごくのを見る。みなマスクやハンケチで覆面してゐる。女裝のものもいる。あるくたびに男子のズボンが見え、男子のあるきぶりがスカートと調和しない。四方八方から人があつまる。野をよこぎり、あるいは道により、ロバートタウン (Robertstown) から、ハイタウン (Heightown) から、一人で、あるいは群をなして、あつまつてくる。――ジョージとソープ (Thorp) が隊伍を編成した……第一團はピストル・銃および何んらかの火器をもつていた。かれらが先頭をきつてすすんだ。……射擊隊のつぎに斧隊が二列にならんだ。その後がハンマーをかついだ身體の大きな連中であつた。……

ジャック (Soldier Jack) が點呼をとつた。『一番』『はい』『二番』『はい』『三番』『はい』『四番』わたくしです』……

ジョージが激勵の演説をする。おわつて『前え』とさけぶ……『ホワイト・ハート』(White Heart) のそばで小憩、ここで『リーズ』(Lees) から來るものと合流する豫定である。しかし、かれらのかげもかたちも見えぬ。……使者がたてられる。あとでわかつたことであるが、使者は一マイル行つたところでかれらに出會つたが、銃聲やわれわれの攻撃のさけびがきこえると尾をまいてかへつたといふことである。とにかく、かれらがすがたをあらわさなかつたことにかわりはない。ふたたび行進にうつる。野原から工場にゆく小路を急に折れまがると工場が見えた。工場は四階で、小さな建物や、乾燥溫室(ドライイングストーブ)その他がついている。小川が音をたてて流れて機械をうごかす水車にそそいでゐた。……あかりはひとつも見えなかつた。月がときどきまどを照らしたが、内からは光がすこしもささなかつた。しかし、けむりが長い煙突からかすかに立ちのぼつていた。それは月曜日の仕事のためにボイラーの火がたかれていることを示していた。

足をはやめて工場の廣場にせまつた。すると、番犬のはげしいほえごえがおこつた。二分とたたぬうちに、會計局(カウンチングハウス)から一條の光線がさした。それがまどからまどへうごくのが見られた。工場の他の部分のあちこちに光がついた。内部の番人が忠實な犬のほえごえをききつけて、部署につき武裝をととのえたことはうたがいない。

『戸を打ちやぶれ、斧隊すすめ』とジョージがさけんだ。斧隊がすすんで武器で戸をうつた。『銃隊整列』『まどに齊射、投石』とするどい命令がくだつた。まどからすが音をたててくだけちつた。銃眼から、まどから應射がきた。エノツク隊がうごいた。滿身の力をこめて打つた。しかし、建物はやぶれなかつた。[343]』

襲撃についてのベン・オ・ビルの記述はここできれる。かれはここで彈をうけて意識をうしなうからである。しかし、かれのこの記述は信頼するに足る。けだし、それは、後のヨーク城内におけるラッダイト裁判における

證人の陳述と一致するからである。われわれは、すすんでそれをうかがはう。

スオーデン(Swoden)――かれはジョージ達とおなじくウッドの店の勞働者で、共犯ではないが、事情は知つていた――はつぎのごとく證言している。

夜の十一時に、ジョージ・アーミテージ卿所有の地所の通稱ダム・スチープル――これはジョージ卿の地所内のオベリスクをさす――のそばに集合のてはずであつた。かれらはそこに行つた。……かれらはそこで集合した。ジョージ・メラーがその團體のもつとも活潑な指導者の一人であるようにおもわれる。かれは總司令官として活動したようにみえる。かれらは軍隊式に整列せしめられ、隊伍に編成され、正面十三人の小隊で行進した。隊列がどれだけあつたかは暗夜の故にわからなかつた。銃をもつたものが先頭をきつた。ピストル隊がこれにつぎ、そして棒や警棒隊および火器のないものが三番隊として行進した。銃隊はメラーが指揮し、ピストル隊はソープが指揮し、三番隊は指揮者不明。[34]

ウイリアム・ホール(William Hall)――かれも、おなじく、ウッド方においてはたらいていた勞働者である――はつぎのことを陳述している。

その夜、かねてきめられていた集合場所――アーミテージ卿の地所に行つた。ついたのは夜の十時ころであつた。すでに四十人乃至六十人ばかりあつまつていた。そこでたつぷり一時間ばかりまつた。そのうちにあつまるものは百人をはるかにこえた。そこで點呼がはじまつた。『名前によらないで番號(名前は危險であつたであらう、けだし、みんながきくであらうから)によつ

た。』みんな自分が返事すべき、わりあてられた、特定の番號をもつていた。かれは七番で、その番號にこたえた。いろいろの隊があつた。――銃隊、ピストル隊、斧隊。メラーとソープが隊伍に編成した。銃隊は二重に整列した。かれと他の一名ジョージ・リッヂ（George Rigge）はしんがりとなり、隊員の逃亡を監視した。かくて、かれらはジョージ・アーミテージ卿の地所から、ハートヘッド・モーア（Hearthead Moor）とよぶ野原をこえて、ローフォルド（Rawfolds）のカートライト氏の工場まで行進した。その距離は約三マイルであつた。アーミテージのこの地所のこの特別の場所はダム・スチープル（オベリスク、あるひはそれに似たもの）とよぶところのものであつた。銃もピストルももたないものは、あるものは、槌（malls）をもち、あるものは斧をもち、なにももたなかつたものはゆくゆく棒や杖をとつて武裝した。工場につくまえにとまつて十三人づつの列をつくつた。メラーが銃隊をつくつた。ソープはつぎの隊すなわちピストル隊に屬したとおもう。……編隊がすむと工場にすすんだ。工場に對して、はげしく、發砲がおこなわれ、槌や斧によるはげしい打擊がなされた。……たれかが『ベルを射て』とさけんだ。ベルを射とばすためである（あるひは、ベルの綱をといつた方がさらに適切であらう）……工場からも射擊がなされた。……射擊戰は二十分ちかくつづいた。……かれらは後一生懸命で四方八方へ逃げた。云々。[35]

ジョセフ・ドレーク（Joseph Drake）――ジョン・ドレーク（John Drake）方の仕あげ工（Cloth-dresser）――の陳述は、人數一三〇人、乃至一五〇人、アーミテージ卿の廣場で番號による點呼、二列編成、隊數不明、銃隊・ピストル隊・斧隊の存在、カートライト氏の工場まで二列縱隊にて行進、工場の六〇ヤード手前で停止、銃擊は十五分乃至二〇分繼續の諸點をあきらかにしてゐる。[36]

以上はいずれも攻擊者の側のいふところである。われわれはさらに攻擊を受けた側のいふところをきかう。そ

うすれば事情が一層はつきりとするとおもう。當のカートライトは法廷でつぎのごとき證言をしている。

四月十一日の夜、カートライト氏は十二時すぎに床についた。床につくまえに、氏は番人達がそれぞれその部署についてゐるのをたしかめた。番人のうち二名は、敵のちかずくのを通報するため戸外に配置してあつた。しかし、よくあるとおり、かれらは不意打にあつて、とらえられた。それで警報をうることはできなかつた。たしか、十二時三十五分ころ、一階（Ground-floor）にくさりでつないであつた大きな犬がはげしくほえはじめた。精敢なカートライト氏はただちに床からとび出して階段にとんで行つた。しかし、かれがしやつはだかでそうしている間に、かれは階上のまどへの急激な小銃の射撃と、道路に面した入口の猛烈なハンマーによる打撃におどろかされた。この工場は、一方の側は池で、ある程度、防衛されてゐた。カートライト氏とその部下達はその前の晩すでに銃を組んでおいていた。カートライト氏はすぐさま、武器をとりに走つた。かれは、床からとび出し、たばかりでしやつのほか何もまとつていない兵士と部下とに出あつた。かれの命令によつて猛烈な射撃がはじまり、約二十分あまりつづいた。その間暴徒もおなじく射撃をつづけていた。暴徒は百名をこえていた。かれらは、『打て！』『押入つたか？』『まけるな、がんばれ』と、もつともおそろしい呪詛をわめきながら、すべてのまど、たいていのまどわく、一つのとびらを打ちこわした。カートライト氏は、これよりさき、建物の頂上に警報のベルをとりつけていた。これが猛烈な力で鳴らされ、ついにベルの綱がきれた。暴徒はベルのなるのをきくと、『ベルを射て、あのベルをだまらせろ』とさけんだ。しかし、カートライト氏の部下の二人がのぼつて行つて、ベルをならした。かれらはかつならし、かつ射つた。ついに、内部よりの射撃をなお繼續しているうちに、おそらく暴徒の彈藥が缺乏をつげたのであろう、攻撃者の射撃は緩漫となり、ついに、ただ一人が一發射つたのを最後に、ついにとまつた。カートライト氏は人々がハッダースフィールドの方向にたちさるのをきいた。そして喧騒がしづまると、負傷してあとにとりのこされた人々のうめきごえをきくことができた。しかし、氏は外に出ることをおそれた。自分がかれらを

殺したといわれないためである。非常にくらくて何も見わけることができなかつた。しかし、援兵が到着したとき、カートライト氏とその部下は外に出た。そして、たくさんの槌・ハンマー・銃等が、ハッダースフィールドへ通ずる道路上に遺棄せられているのを見た。かれらは、また、重傷のために逃亡することのできなかつた二人の人を發見した。この二人はあとで不幸にも死亡した。コロナーの判事 (Coroner's Jury) は當然の義務上裁判して、『正當なる殺人』(justifiable homicide) との判決を下した。[37]

朝になつて日光がさしてきたとき、ひとびとが工場の狀態を一層綿密に調査してみると、一階のすべてのまどのわくとガラスは、三百枚のガラス板の中の約九枚をのぞいて、みな、こつぱみぢんにくだかれてをり、工場のドアは斧で伐られ、かれらのいはゆる槌でたくさんの打擊をうけ、そのためにドアの板はこなごなにくだけ、伐られてあながあき、ほとんど、人が手をとおすことができ、ドアの戸柱の石も、同樣、ドアをこわした道具類でこわされてをり、多くの上層のまどのわくおよび多くの角ガラスもこわされていた。[38]

さらに、判事のル・ブラン (Le Blanc) 氏はつぎのごとくいつている。『カートライト氏のいふところによれば、かれの建物は石造なので、まどは石の中のわくの中にはめこまれていたはずである。わくも角ガラスもこわされ、ある場合には、まど全體、ガラス、わく、一切が、まつたく、おしこまれ、こわされていた。一階中、まつたく、だめにせられ、まつたくあらたにせられねばならないといふことのないわくはひとつもなかつた。だから、わたくしは、カートライト氏の陳述からつぎのごとくまとめる。石造の中にはめこまれたこれらのわくは、ある場合、まつたくこわされ、くだかれ、ドアも同樣にこわされ、戸柱の石は二ケ所くだきとばされた、と。』[39]

以上、われわれは、攻擊者の側と防衛者の側と双方のかたるところによりて、カートライト氏の工場の襲擊の模樣の大體をほぼあきらかにするを得たかとおもうが、ただ、戰鬪そのものの狀況がやや不充分のきらいなしと

せぬようにおもはれぬでもない。そこで、ブロンテによるその描寫をここに利用するのも、かならずしも、むだではあるまい。それはラッダイトがモーア氏の工場を襲擊するのをその寸前に知つたシャーリーとカロリーンなる二女性が、急をモーア氏に報ぜんとして工場にかけつけるが、時すでにおそく、工場を見おろす丘の上より襲擊の光景をながめるところに見出される。つぎのごとくである。

……白いはずの道路は人で黑くなつていた。暴徒はとざされた門の前にあつまつていた。そしてひとつの人影が內側にあつた。それはかれらによびかけていた。工場自體はまつたく黑くて靜であつた。その周圍には人も光も、また、なんらのうごきもなかつた……――シャーリー！　シャーリー！　門がたおされた！　あの音は大木がたおれるのに似ています。いまや、かれらは亂入しています。かれらは門をうちやぶつたように、工場のドアをも、うちやぶるでしよう。あんな多勢にむかつて、ロバートは何をすることができましよう？……

――かれらは攻擊する。とシャーリーはさけんだ。なんとしつかりと、かれらの進入することよ。かれらの隊には訓練があるわ。

――わたくしはかれらに勇氣があるとはいわないわ。數十人に對する數百人は勇氣の證據にはならないもの。しかし、（と、かの女はこえをおとした。）かれらの中には苦悶と絕望がみちています。そのつよい刺戟がかれらをすすませるでしよう。

――ロバートにむかつて進擊します。――そして、かれらはロバートをにくんでいます。シャーリー、かれらが勝利をうる危險が多分にありますか？

――いまにわかります、モーアとヘルストーンは、この地上で第一級の人ですよ。無器用者ではありません、臆病者でもありません――

もののこわれる音、ものをうつひびき――震動――が、かの女等のささやきをとめた。工場の廣い正面のすべてのまどに石の齊

射の挨拶がおくられた。そして、いまや、すべての『組格子』のガラス板はこなごなにうちくだかれた。この示威運動につづいて、ときのこえがあがつた。―暴徒のときのこえ―北イングランドのときのこえ――ヨークシャーの――ヨークシャーのウエストライディング・羅紗地帶の暴徒のときのこえ……

ときのこえは長かつた。そして、それがやんだとき、群集のざわめきやつぶやきが夜をこめていた。……

暴徒が發砲した。まもる側はこのあいづをまつていたのであろうか？　どうもそうらしい。それまでうけみであつた工場がうごき出した。そのからのまどわくから閃光がきらめいた。小銃の一齊射撃がホロウの空にとどろいた……

いま、何がおこつているか？　暗黑の中でそれを知ることは困難のようにおもわれる。だが、なにかおそろしいこと、しつきりなしにあらたなるごたごたが、つづいておこることは、あきらかである。激烈な攻撃、必死の反撃、工場の廣場、工場自體、いたるところ、戰鬪が展開していた。いまや、射撃のたえまはほとんどない。爭鬪、突進、蹂躙、その間をぬうときのこえ、攻撃者の目的は工場に亂入するにあり、防衛者の目的はかれらをうちはろうにあるもののようにみえた。かれら（譯者註、―シャーリーとカロリーンの二女性）は賊徒の指揮者が『うらへ』とさけぶのをきいた。かれらは『まわつて來い。まちうけている』といいかえすこえをきいた。『事務所へ』と、また命令があつた。やつて來いそこで見參しようと返事があつた。かくて暴徒の大衆が事務所におしよせたとき、その正面からの火と叫びは最高潮に達した。こえはモーア自身のこえであつた。かの女等にはその調子で、かれらの精神が、いま鬪爭で灼熱していることがわかつた。そこで爭鬪しているそれらの人々のたれもの中に『戰鬪的動物』がよびさまされ、しばらくの間、まつたく、『理性的人間』を超克していることが、かの女等に推察できた。……

モーアはいく日も、おそらくいく週も前から、この攻撃を豫期していた。かれは、あらゆる點で、それに對する用意をしていた。かれは、もともと頑丈な自分の工場を、防備をほどこし、守備兵をおいて、かためていた。かれは、冷靜な、かつ、勇敢な男であつた。かれは、斷乎として防衛に立つた。かれとともにあつた人々は、かれの氣性に感染し、かれの行動にならつた。暴

徒は、こんな目にあうのは、はじめてであつた。かれらが攻撃した他の工場では、かれらはなんらの抵抗をもうけなかつた。組織的な斷乎たる防禦にあうことは、かれらの夢想だにしなかつたところである。かれらの指揮者は、工場から繼續せられる、しつかりした射撃をみ、工場主の沈着と決意をまのあたりにし、かれらが、ひややかにいどまれ、死の道へまねかれるのをきき、そして自分の周圍に自分の部下達がきづつきたおれるのをみたとき、かれらは、ここでは、いかんともなすことができぬことを知つた。かれらは、いそいで軍勢をひきまとめ、建物からしりぞいた。點呼がおこなわれた。人々は名前にではなくて、番號にこたえた。かれらは野原にひろくちらばつた。あとには寂靜と荒廢がのこつた。攻撃はその開始から終結まで、一時間とはかからなかつた。

もう、夜あけにちかづいていた。西はくらかつたが、東はかがやきそめていた。……氣持のよい光景ではなかつた。すがすがしい夏のあけがたの前面に、いまや、構内は荒廢のけがれにすぎなかつた。ホロウ倚りの樹木はみな日をうけず露をふくんでいた。丘のいただきはみどりいろをしていた。しかし、ここ、かぐわしい谷間の中心は、夜の間に制馭をやぶつて出た不調和が、大地をふみあらし、荒廢と破壞に化してしまつた。

すつかりこわれてしまつて、すべてのわくにガラスのない工場が、あくびをしていた。構内は石や煉瓦の破片で一ぱいであつた。まどのすぐ下はキラキラする破片で一ぱいであつた。そこ、ここに、銃やその他の武器がころがつていた。砂利の上には、あちこちに、濃いくれないの汚點がみられた。一人の人間の身體が門のそばに、しづかにうつぶせになつて、よこたわつていた。そして、五六人の負傷者が、血のごみの中で、もだえ、うめいていた。……

かくて、モーア氏とヘルストーン氏は、構内をあるきまわり、それから、負傷者を工場内へはこびこむよう指令をあたへた。その義務がはたされると、ジョー・スコットが主人の馬とヘルストーン氏の馬にくらをおくよう命ぜられた。それから二人の紳士は全速力で醫者の助力をもとめに別々の方向に馬を走らせた。[40]

なほ、この襲撃に關して、ガスケル夫人はつぎのごとき興味ある事實をしるしている。

二十分の激戰――その間に攻擊者は二人が死亡し、數名が負傷した――の後、かれらは混亂して撤退し、カートライト氏が勝利者としてのこつた。しかし、氏は非常に疲勞し、目がくらんだ。そのために、防衛施設の性質を失念し、自分の階段をのぼらんとする際、スパイクのついたローラーの一つで、足にかなりの重傷を負うた。かれの住居は工場のちかくにあつた。暴徒の中のある者は、もし、おし入ることができなかつたら、かれの住居におしよせて、かれの妻子を殺してやるんだとちかつていた。これはおそろしい脅迫であつた。というのは、かれは、家族を、ただ一、二名の兵士を護衛につけて、のこしておかざるを得なかつたからである。カートライト氏夫人は、かれらの脅迫をよく知つていた。それで、そのおそろしい夜、足音がちかづくのを聞いたとおもつたとき、かの女は二人の幼兒をひつつかんで、かごに入れ、蠶式のヨークシャーの家によくある大きな煙突の中につるした。このようにしてかくされた子供の中の一人は一人まえの女に成人して後、父親の工場の壁にのこれる銃擊の痕や火藥の跡を、ほこらかに指示するを常とした。かれは、このころになると勢力が非常に增大してほとんど叛亂軍の樣相性格をさえおぶるにいたつたラッダイトの進行に對して、なんらかの抵抗をこころみた最初の人であつた。カートライト氏の行動は、近傍の製造業者達の非常に稱讚するところとなり、かれらは氏のために義金を據出し、その額はついに三千ポンドに達した。[41]」

ただし、カートライト氏が當夜の事件をその友人に書きおくつた手紙の中にわれわれはつぎの一句を讀むことができることをつけくわえておかねばならない。

『わたくしの家族は近距離、四分の一マイルのところにいたのにもかかわらず、さいわいにも事件を知らなかつた。[41]』

われわれは以上においてラッダイトの工場襲撃の狀況をうかがつた。ところで、ラッダイトが工場を襲撃するのはいうまでもなく機械を破壞するためである。しかるに機械を破壞するのには、かならずしも工場を襲撃せねばならぬというわけはない。機械製造者より工場までの機械の運送途上においてこれを破壞することもできる理である。かくて、われわれは、かかるケースをもあげることができる。われわれは、ここには、『シャーリー』の中からその一例を引いておこう。

夜ばしづかで、くらく、どんよりとしていた。水は滿々として、はやく流れていた。その流は、あたりがまつたくしづかなので、ほとんど洪水のようにおもわれた。しかし、モーアの耳はべつのひびき—はるか遠くの、しかし異樣な—とぎれとぎれのゴトゴトした—をとらえた。間もなく、石の道にきしる重い車輪のひびきを耳にした。かれは事務室に引きかえし、角燈をつけ、それをもつて、工場の構内を通つて門をあけに行つた。大きな荷車が近づきつつあつた。荷馬の大きなひづめが泥や水をはねるのがきこえた。モーアはその方へいそいだ。

——おい、ジョー・スコット！無事か？　おそらくジョースコットはまだ遠くできこえなかつたのであろう、返事はなかつた。

——おい、無事か？

と、象のような先導馬の鼻がほとんどかれの鼻にすれすれになつたとき、ふたたびモーア氏はたづねた。たれかが先頭の荷馬車から道へとびおりた。ひとつのこえがたからかにきけんだ。

――こんちくしよう、無事だあ！　やつつけてやつたあ――、
そして、逃げて行つた。荷馬車はしづかにとまつた。いまやたれもいなくなつた。
――ジョー、スコット！
ジョー、スコットの返事はなかつた。――マルガロイド……ビイギルスー、サイクス！、
返事はなかつた。モーア氏は角燈をあげて車の中をのぞきこんだ。人も機械もなかつた。中はからですてられていた。
……
一匹の馬が、せつかちなあがきをしたので、かれは見あげた。その瞬間かれの眼は、馬具の一部にとりつけられた、なにか白くひかるものを見た。角燈の光でしらべてみると、これはおりたたんだ紙――一通の手紙であつた。表には宛名がなかつた。内にはつぎの宛名があつた。――『ホロウ工場の鬼へ』……
つぎのごとく書かれていた。
おまえの地獄の機械はスチルブローの野原で打たれてふるえている。おまえの部下は手足をしばられて道ばたの溝の中にころがつている。これを、みづからも飢えてをり、この仕事のあとで飢えた妻子の待つ家に歸らねばならぬ人間からの警告として受けとれよ。おまえが、また、あたらしい機械を手に入れれば、また、そのほかでも、いままでどおりのことをつづけるならば、われわれはまたお見舞申すぞ、注意せよ。[43]

機械を、それが備えつけられる工場えの運送途上において、破壊するということは、機械が工場に備えつけられる以前において機械を破壊することである。そして、機械が工場に備えつけられる以前において機械を破壊するということをおしつめて行けば、あるいは、機械製造業者の工場において羊毛工業の機械を破壊するということ

とも考えられよう。さらにすすんでは、機械製造者をしてかかる機械の製造を停止せしむるように强請し、それがきいれられない場合には、その製造工場を襲撃してその製作機械を破壞することも考えられうるであらう。そして、この最後の途はラッダイトにとつては禍の根源を斷つものであつて、それだけに效果的であるとさへいえよう。すくなくともそれは比較的勞すくなくして、比較的效多いものでなければならないであろう。けだし、單に羊毛工場を襲撃して、その機械を破壞するだけでは、屋根を修繕せずして、雨もりの水をぬぐふに似たものがあると見うるであろうからである。げんに、ベン・オ・ビルも、ジョージ・メラーにつぎのごとくかたつてゐる。

――エノックは機械の製造を中止しようとしない。親方達は頑强である。そしてかれらも亦イギリス人である。われわれは一千の機械を破壞し、イングランドのすべての工場、店から機械を一掃することができるかも知れない。しかし、よりよい機械があらわれてその後にとつてかわるであろう。[44]

ところが、不思議なことには、事態はその方向にむかつて進展していない。すくなくとも、われわれはそのような事例を見出し得ない、といつてよいようである。それは一體どうしたことであろうか。あるいは、機械製造工場は、なんといつても重工業に近く、また羊毛工場よりは都會の中心地にありそれらの事情がラッダイトの襲撃を不可能乃至きわめて困難なる仕事たらしむるものであつたのかも知れないという風に考えられるかも知れない。それにしても、また、一方から考えると、たとえば、ウエツブのごとき、各種產業の勞働者達がラッダイトに同情を表して資金を醵出したということを指摘しているぐらい[45]であつてみれば、たとへラッダイトによるこれら工場の襲撃はできないとしても、これらの工場の勞働者達の中にいわゆる同情罷工をやるものがあつてもよい

のではないかともおもわれぬでもない。が、そのような事情もみつからぬようである。そこで、わたくしはおもふ。ラッダイトの機械破壊はかならずしも機械に對する呪詛からのみ生じたものではなくて、そこには製造業者への強烈なる憎悪がひそんでいたのではないであろうか。換言すれば、この場合、機械の破壊を通じて製造業者への怨恨をはらすという事情がありはしなかつたか。すなわち、ラッダイトの機械破壊は、所詮、いわゆる羊毛工業における勞資對立の一つの表現形態として把握せらるべきものではあるまいか。そして、すでに、かく解することができるとすれば、ラッダイトの機械破壊が、さらに一歩をすすめて、製造業者その人の暗殺に轉ずるにいたるのは多くあやしむをもちひぬところでなければなるまい。それはともかく、ラッダイトの行動はついに資本家の財産より轉じて生命におよぶを見ることとなる。われわれは、かれらラッダイトが、『親方の生存するかぎり、機械破壊は無意味であるということを自認し、かくて親方を破壊することによりて公共に奉仕すべきである。とみずからを説得するにいたる』[46]をみる。メラーが上述のカートライト氏の工場の襲撃に失敗した後で『機械を破壊しても仕方がない。親方を射殺するあるのみ』(There is no method of smashing the machinery, but by shooting the masters)[47]といつたことは、ヨーク城におけるラッダイトの公判廷における證言によりてかくれもないところである。そして、われわれは親方たちが悲命にたおれるのを見ることとなる。われわれは、そのもつとも顯著なケースとしてホルスフォール氏のそれをあげることができる。

ホルスフォール (William Horsfall) 氏は四十歳ばかりの妻子のある人で、ウエストライディングでかなりな製造業者であつた。工場には四百人をこえる勞働者を雇傭しており、氏はかれらの敬愛をうけていた。(とパークス氏はいつている)かれは機械を採用していた。同情に富み、非常に頭のよい人であつた。ラッダイトの、機械が失業

をつくり、勞働者を悲慘な狀態におとしいれる、とする考え方を否定し、機械は國家の利益を增進するものであると信じていた。そして、自分の信念を公然と表明してはばからなかつた。したがつて、ラッダイト運動には明確な非難をあびせるに躊躇しなかつた。それで、一部の人々から、やつつけてしまわねばならぬ、とねらはれていた。ヨークにおけるラッダイトの公判におけるパーク氏のことばによれば。

かれが火曜日に開かれるハッダースフィールド・マーケットに出席するを常としていたことは周知のところであつた。四月二十八日かれは市場に行き、午後四時から六時の間に歸途についた。その時季は彼岸をすぎてかなりになるので、太陽は七時十五分乃至二十分ころまで沒しない。したがつて、まだ、あかるかつた。かれは騎馬でハッダースフィールドから自宅にむかつてすすんでいた。自宅は七マイルばかり先のマースデン (Marsden) にあつた。かれは、ハッダースフィールドからワレン・ハウス (Warren House) とよばれる家——アーミテージ (Armitage) といふ人の經營する居酒屋 (public house)——までくると、そこで馬をとめラムを一杯のんだ。そしてそこで二人の顏見知りのものを見て、各々にヂンを一杯づつふるまつた。そして、支拂ひをすませて、馬を乘りつづけてワレンハウスから二三百ヤードはなれた耕作場 (plantation) の角まで行つた。その耕作場は奉行のラードクリッフ氏 (Mr. Radcliffe the magistrate) の所有に屬するものであつた。その耕作場の裏側は野原にむかつて開けてをり、それから第二の野原があり南方に下り坂に傾斜している。そして、第三の野原が南にむかつてあり、そしてハッダースフィールドからクロッスランド (Crossland) への道路と交叉している。……この耕作場のまわり角でこの不幸な紳士ホルスフォール氏は射たれたのである。かれはすぐ馬の首につつ伏し、『人殺し』とさけび、すぐそのあと地上に落ちた。パール (Parr) という人がすこしあとから馬に乘ってすすんでいた。二人の間に面識はなかつた。しかし、パール氏はピストルの音をきき、ホルスフォール氏が『人殺し』とさけぶのをきくや、かけつけた。ホルスフォール氏は『おたがい存じあげない間柄ですが、どうか、ホルスフォール氏方へ行つて援けをよんで來て下さい、お願いします』といつた。パール氏が、『あなたがマースデンのホルスフ

ォール氏ですか』というと、かれは『そうです』といつた。そこで、パール氏は援けをもとめに馬をかへした。バンニスター(Bannister)という人が馬で駈けつけ、ホルスフォール氏を抱きおこし、車が來ると、それでホルスフォール氏はワレンハウスまではこばれた。そこで、かれは二十八時間くるしみとうして、死亡した。[45]』

かく、ラツダイトの行動は工場を襲撃して機械を破壞することから、すすんで製造業者を襲撃してその生命に危害を加えることにまでいたるを見る。しかし、それらはラツダイトの行動として、わかる。ラツダイトがかかる行動をなすからといつておどろくにはあたらぬであろう。いな、かかる行動をなすのが、ラツダイトのラツダイトたる所以であるといつてよいのではないかとさえおもわれる。しかしながら、ラツダイトの公判記錄を見ると强盜の件が非常に多いのが眼につく。もちろん銃火器については、さきにも指摘したごとく、かれらにとつて理由あるところであり、それだけに、われわれはそれについてあやしむをもちいぬのであるが、それは、かならずしも銃火器にかぎらぬのである。單なる押込强盜とえらぶなき場合すらあつたようである。あるいは、それはラツダイトの行動ではなくて單なる强盜がラツダイトの名をかたつたものであるかも知れない。それもなかつたとはいえまい。維新の前夜、江戸で勤王浪士の名をかたつて押込强盜をやつたものもあつたといわれている。この場合にもそのようなことがあつたとしてもべつに不思議はあるまい。人間の考えること、することは似たようなものである。それにしても、ラツダイトの公判に附せられている以上、われわれはそれをも、うかがつておく必要があろう。わたくしはここに一つの例をあげておく。

一八一二年七月三日の夜、ジョン・スワロー(John Swallow)ジョン・バトレイ(John Batley)ジョセフ・フイシヤー(Joseph Fischer)およびジョン・ラム(John Lumb)等がホイツトレー・アツパー(Whitley Upper)のサムエ

ル・モックソン (Samuel Moxon) の住居をおそつて、金品を強奪している。かれらは家にちかずくと、まず發砲して家人をおどし、門をあけろと命じた。(以下公判廷におけるパーク氏のことばによる。)

『家があけられると、農夫の仕事着かなにか白い衣服を着物の上にまとつた一人が闖入した。かれは、ウイリヤム・モックソン (William Moxon) をとらえて、武器を出せと強要した。それはラッダイトの名の下にこの種の犯罪を敢てするものが、まづ第一になす要求である。モックソンは『武器はない』とこたえた。『何、それなら』とその男はいつた、『金があるだろう。』そこで、モックソンは、かれらに、一ポンド紙幣と銀貨で一〇シリング乃至一二シリングをあたえた。かれはそのおなじ人間――その男はピストルで武裝していた――からせきたてられてパーラーに入つた。そこで『この家には、もつと金があることを知つている。もつと金をくれなければ頭を射ち拔くぞ』といわれた。それで、モックソンは所持していた一ポンドのイングランド銀行券二枚をあたえた。かれは、もし出さなかつたら頭を射つてやるんだつたといわれた。そして囚人(譯者註、公判廷でのこと故、犯人はかくよばれたわけである)の一人は『おい、どけ、邪魔するな、あいつを射つてやるんだ』といつた。しかし、かれをきづつけるために發砲されはしなかつた。それから、かれらは家の地下室にはいり、たくさんの財産、ハング・ビーフ、舌、それからバターを七八ポンドあるいは九ポンド、さらにウインターヘッヂ (winter-hedge) とよばれてゐるもの(わたくしは何か着物かけに類するものと理解する)にかかつていた多量の布地をもち出した。……そしてそれらの品物は後で囚人達に分配された。[49]』

(1) *E. G.* Karl Marx, Das Kapital, I,10, Aufl. SS. 392—393, Paul Mantoux, La Révolution Industrielle au XVIIIe Siecle, p. 423.

(2) *E. G.* Proceedings at York Special Commission, pp. xi—xii.

(3) *E. G.* P. Mantoux, *ibid.* p. 425.

(4) J. C. Hammond and Barbara Hammond, The Skilled Labourer 1760—1832, pp. 302—304.

(5) Sykes, *ibid.* p. 98.

(6) *Ibid.* p. 99

(7) *Ibid.* p. 53. Proceedings at York Special Commission, p. 194.

(8) *Ibid.* pp. 138, 149. Sykes. *ibid.* p. 123.

(9) *Ibid.* p. 127.

(10) Proceedings at York Special Commission, pp. 10, 160, 181, 191, 205.

(11) *Ibd.* p. 167, Sykes, *ibid.* p. 66.

(12) *Ibib.*

(13) *Ibid.* pp. 31, 116—117.

(14) *Ibid.* p. 123, Proceedings at York Special Commission, pp. 138, 149.

(15) *Ibid.* p. 149. Sykes, *ibid.* p. 123. C. Brontē, Shirley, II. Ch. ii, p. 27.

(16) Proceedings at York Special Commission, *e. g.* p. 9.

(17) Sykes, p. 96.

(18) *Ibid.* pp. 89—93.

(19) Proceedings at York Special Commission, p. 186

(20) *Ibid.* p. 185

(21) *Ibid.* pp .181—190.

(22) *Ibid.* p. 181.

(23) *Ibid.* p. 136.

(24) C. Brontē, Shirley, I, Ch. ii. (Thornton ed.) pp. 30—31.

(25) Proceedings at York Special Commission, p. ix.

(26) Mrs. Gaskell, The Life of Charlottē Brontē p. 80.
(27) *Ibid.* p. 90—91.
(28) *Ibid.* p. 308.
(29) C. Brontē, *ibid.* I. p. 30.
(30) *Ibid.* pp. 30—31.
(31) Proceedings at York Special Commission, pp. 135—136.
(32) Sykes, *ibid.* p. 98.
(33) *Ibid.* p. 100.
(34) *Ibid.* pp. 119—129.
(35) Proceedings at York Special Commission, p. 138.
(36) *Ibid.* pp. 149—150.
(37) *Ibid.* p. 153.
(38) *Ibid.* pp. 136—137. pp. 145—146.
(39) *Ibid.* pp. 146—147.
(40) *Ibid.* p. 147.
(41) C. Brontē, *ibid.* pp. 33—44.
(42) Mrs. Gaskell, *ibid.* pp. 91—93.
(43) J. C. Hammond and Barbara Hammond, *ibid.* pp. 305—306.
(44) C. Brontē, *ibid.* I. ii. pp. 41—43.
(45) Sykes, *ibid.* pp, 116—117.
Sidney and Beatrice, Webb, The History of Trade Unionism, 1920. p. 88.

(46) Proceedings at York Special Commission, p. ix.
(47) *Ibid.* p. 50.
(48) *Ibid.* pp. 35—37.
(49) *Ibid.* pp. 9—10.

四　影　響

ラッダイトが上述のごとき行動をおこすとき、それが非常な影響を社會にまきおこすであろうことは、想像にかたくないであろう。それではその影響はいかにあつたであろうか。

まず、それが製造業者達に大なる脅威をあたえたことにおいて見られることは、あらためて述べるまでもあるまい。製造業者達がいかにラッダイトの行動によりて脅威を受けたかは、われわれは、たとえば、前述の、Sなにがしが襲撃を受けた際の態度や、ブロンテがその『シャーリー』においてモーア氏をしていかに他の製造業者がその脅威の前に意氣地がないかを慨嘆せしめていることなどよりしても推想しうるかとおもうが、また、例のヨーク城におけるラッダイトの公判が、『製造業者 (the master manufacturers) や機械所有者 (owners of frames) 達の怯懦が告發を極度に厭惡せしめたので、政府は、名義上の告發者に代つて告發することにより、裁判を開くことが、公共の利益のために絶對的に必要であると思惟した』[1]によつて、開かれるにいたつたことを知れば思いなかばにすぎるものがあろう。

しかしながら、ラッダイトの行動から脅威を感ずるのは、ひとり製造業者や機械所有者のみにはとどまらない。

一般富裕者階級も亦一抹不安の念を抱いたにちがいないとおもう。けだし、ラッダイトの行動は社會の治安を亂すが、社會の治安の亂れをもっともおそれるものは、富裕者階級でなければならないこと、いうまでもないところであろうからである。ことに、ラッダイトの中に革命的思想がうかがえること、すでにわれわれのながめたるところのごとくであるにおいて、それはなほさらでなければならない。もつとも、これに對して、上層富裕のものもラッダイトを支持し、ためにラッダイトの檢擧がはかどらなかつたとするむきもある。[2] なるほど、ラッダイト公判の記錄を見ると、證人の中には容疑者を擁護する言を吐くものがすくなくない。[3] しかし、それはかえつてこれらの人々がラッダイトの復讐をおそれていることを示すものとも解し得るのではないであろうか。たとえばさきに引いたヒンクリツフ氏のごときも加害者ショフィールドについて證言するに躊躇しており、犯人が八月五日ロンドンで逮捕せられるにおよんで、はじめてその名をいつており、これについて、パーク氏は公判廷において、『それはきわめてありうることである。當時における人々、とくに、この州のあの地方に住む人々の危險や懸念は非常に大なるものがあつたので、……かれらは、自分は政府または軍隊の保護の下にあるとわかるまでは、言明することをおそれた[4]』といつている。おもうに、上流階級に屬するもので、ラッダイトに同情を惜しまぬものがあつたとすれば、それはバイロン卿など特別の人で、例外的といつてよいほど少數にすぎなかつたのではなかろうか。そして、その他のものは、あたらしい機械を設備することのできぬ製造業者か、でなければ、いわゆる斜陽族のたぐいと見てたいしてあやまりなきにちかいのではあるまいか。

またまた、ここに、ブロンテを引き合いに出せば、かの女は『シャーリー』の中で、恐怖の念が、製造業者のみならず、ほとんどすべての、その地方の有力者の行動をさまたげたこと、奉行達は、怯懦でありのろまであり、

モーア氏が自分の工場襲撃犯人の検挙を督促すると、モーア氏をはばかり、おそれたこと、を、われわれにつたえている。[5]

われわれは、さらに、このことを證するいま一つの根據をあげることができる。それは例のヨーク城におけるラッダイトの公判において、有罪の判決をあたえるのにあたつて、勇氣をもつてすることが、しばしば陪審員に對して要求せられていることである。たとえば、最初の公判においてパーク氏は事件を陪審員に説明したる後つぎのごとくむすんでいる。

『紳士諸君、かくのごときが、わたくしの諸君に申し上げるべき事件であります。わたくしは、ついに、おそらく閣下の必要なりと考えられるよりも以上に深入りいたしました。しかしながら、わたくしは、すくなくとも、これら諸事件の最初のものにおいて、諸君が、わたくしの諸君にしてもらいたいとのぞむ起訴の仕方を、充分に御承知になるように、廣範にそれに立ち入ることは、わたくしの負わされたる責務と考えました。それはきわめて苦しい義務であります。しかしながら、それは、たしかに、われわれの、囚人達に對する同情と注意をもつて、なさねばならないところの義務であります。しかしながら、それは公共の利害に關しまするが故に男男しさをもつてなさなければならない義務であります。[6]』

かくラッダイトは製造業者・機械所有者・その他の富裕者、要するに社會の上流層をして脅威に戰慄せしめたが、しかしながら勞働者層がこれを歡迎し、これに同情をもち、これを支援したことは、これまた容易に理解しうるところであろう。ウエッブ夫妻はその『勞働組合史』において、ラッダイトが多方面の勞働者より資金の援

助を受けた旨を記して[7]いる。

さらに、また、勞働者ではなくても、一般貧困な、社會の下層階級がラッダイトの行動に好意をもつにいたつたであろうことも、きわめて自然のなりゆきと考えてさしつかえあるまい。事實、ベン・オ・ビルの回想錄に、われわれはつぎのごとき記述を見出すことができる。

『民衆はほかのことは何も話さなかつた。いづこへ行つても、きくのは、不幸と、缺乏と、親方と抗爭するために結集した人々、のことであつた。そして、ラッダイトは民衆の人氣があつた。……勞働者は、その仕事が新機械の脅威を受けないものさへも、ラッダイトに好意をもつた。わたくしは、その年（譯者註―一八一二年）の五月、ラードクリッフ氏の許へある情報をもつて行つたとおもわれたベリ・ブロウ（Berry Brow）の一人のまずしい女が、近所の人々から、ほとんどすたすたにせられたのをおもい出す。かの女の頭蓋骨は石で打ちくだかれた。おそらくラッダイトは一般の人氣があるから安全とおもつたからであろう、かれらの祕密はよくたもたれなかつた。[8]

ウエッブによれば軍隊の中にさえラッダイトに同情して軍資金を據出したものがあるということである。[9]

かくて、ラッダイトは、内は誓約により團結をかたくし、外は大衆の同情をあつめ、その結果、その犯人の檢擧はきわめて困難で、法の手は、のびることときわめて緩漫であつた。[10]そのことはラッダイトをしてますます大膽ならしめ、その脅威をいよいよ大ならしめ、治安の紊亂社會の不安を層一層、深刻化せずにはおかなかつたであろう。そこで、當局はいまや、ラッダイトに對して斷乎たる彈壓の手段を講ぜざるを得ないことになつた。それではそれはいかにあつたか。われわれは、そのいちじるしいものとして、つぎのごときをあげることができるかとおもう。

一、法令の發布
二、軍隊の派遣
三、保安隊
四、密告の奬勵
五、スパイ政策

法令としては、これより以前にすでにつぎのごときものがあつた。

1. The Statute of I George I.

これは普通、兇徒嘯集條令 (Riot Act) とよばれ、それは、何人にても十二人またはそれ以上の人數にて、不法に集合し、暴行・騷擾、もつて公安を害し、この法に指定せられたる宣告の後解散せず、同樣の狀態を一時間にわたり繼續するものは重罪に處する。(shall be guilty of Felony without benefit of Clergy)。そして、同條令は、かく不法に、集合し、暴行・騷擾、もつて公安を害したるものが、不法に、かつ、力をもつて、住居または同條令に規定せる他の建物を破壞もしくはひきたおす (demolish or pull down) ときは、また、重罪に處する。

2. The Statute of 9 George III.

これは、集合して暴行騷擾したるものが風力木挽場 (wind saw-mill) もしくはその他の風車場 (windmill)、または、水車場 (watermill) もしくはその他の製造所 (mill) を破壞しもしくはひきたおし、または、破壞しもしくはひきたおすことをはじめ、もしくは右のものに放火するときは重罪 (a capital Felony) に處する。

3. The Act of 43 George. III. cap. 58

これは、王の臣民を毀損し (injure) もしくは侵害する (defraud) 意圖をもつて、(なかんづく) 製造所 (mill) 倉庫 (warehouse) もしくは店舗 (shop) に故意に放火するときは、その犯人 (offenders)、その被相談者 (their counsellor) 幇助者および教唆者を重刑に處する (subjecting……to a capital punishment) 旨を規定する。

4. The Statute of 22 George III. cap. 40.

これは、何人にても、白晝もしくは夜間、機上にあるサージ (serge) もしくはその他の羊毛製品、または、その製造に使用する道具を切斷 (cut) もしくは破壞 (destroy) する意圖をもつて、他人の家もしくは店舗に押し入り、(break into) もしくは、暴力をもつて侵入し、または、故意に (willfully and maliciously) 機上もしくは臺上のサージもしくは羊毛製品を切斷もしくは破壞し、または、故意に、かかるサージもしくはその他の羊毛製品の製造に使用する道具を破壞 (break or destroy) するときは、かかる犯人は重罪に處する (guilty of Felony without benefit of Clergy) とする。

5. The Statute of 37 George III. cap. 123.

これは、不法宣誓罪の規定であつて、いかなる方法または形式たるを問わず、いやしくも、誓約せるものを拘束して以下のことをなさしむる目的をもつ (purporting and intending) 誓約をなさしめ、またはなすこと (the administering or taking of any oath or engagement) を直接または間接にとりおこなひ、または、援助し (aiding or assisting)、または、これに立ち會ひ、同意するものは、重罪に處し、七年をこえざる流刑を課せられるであろう。脅迫を受けることなくしてかかる誓約をなしたるものも、また、重罪に處し、同様に流刑を課せらるるであろう、と規定する。

一、上官抵抗、もしくは、治安攪亂の目的に從事すること、一、公安紊亂、一、上記の目的の下に結成せられたる結社（associate or society）・陰謀への加入、一、非合法な委員會もしくは團體、またはその目的に對して法的權威を有せざる指導者もしくは命令者もしくは他のもの、の命令（orders or commands）に對する服從、一、結社・陰謀もしくは他のものの、不利なる情報をつたえ、もしくは、證據の曝露（reveal or discover）をなさざること、一、非合法な結社もしくは陰謀の曝露をなさざること、一、既遂もしくは未遂の不法行爲の曝露をなさざること、一、上記の人（person or persons）によりてとりおこなはれ、もしくは、申し出され、または、なされたる、または、その他の人に對して强要せられ、もしくは、その他の人によりてなされたる、不法なる誓約、または、かかる誓約の旨意を、曝露せざること。

ただし、誓約が脅迫の下になされたるとき、誓約者は誓約の日より四日以內（不可抗力もしくは病氣の場合はこのかぎりにあらず、その場合はその後四日以內）に、右事實、および右事實に關して知るところの一切、ならびに、誓約をとりおこなひたるもの、立會人、時日および場所を、同法の命ずる方法により、誓言するにあらざれば、責をまぬがるることなきものとする。そして、上記の誓約をとりおこなひ、または、援助し、それに立ち會い、および、同意したるすべてのものならびに、誓約をとりおこなはしめたるすべてのものは、その現場にあらず、實際に誓約をとりおこなひたるものが裁判を受け處罰せられおらぬ場合といへども主犯と見做し、主犯として裁判に附せられるものとする。また、誓約をなさしめ、または、なすことを、直接または間接にとりおこなひ、または、それに援助し、立會い、もしくは同意したるものを、起訴するにあたりては、右誓約の文言を述ぶるの要なく、その目的もしくはその重要なる部分を述ぶるをもつて足るものとせられる。ただし、形式もしくは方法の如何を

問わず、いやしくも、約束もしくは義務が誓約の性質を有する以上、本法にいう誓約と見做されるものとする。

しかるに、ラッダイトの勢が右のごとく擴大し、しかも檢舉が意のごとくすすまぬのはその團結の强固なるにより　そしてその團結の强固なるは宣誓に負うところ多しと考えられ、宣誓執行の罪に就いてさらに嚴重なる法令が發布せられ、一八一二年七月九日施行を見ることとなつたものである。それがすなわち、The 52d of the present King, cap. 104.（ただし當時の稱呼に從う）で、宣誓をなしたるものを拘束して、反逆、殺人、乃至死刑にあたる重罪を遂行せしめんとする目的をもつて、誓約をとりおこなひ、または援助するものを重罪（a felon without benefit of Clergy）として死刑に處し、迫脅を受けることなくして右の誓約をなすものは、重罪に處し、終身もしくはかれを審理する法廷の定むる期間の流刑を課す。但し、宣誓をなしたるもの右の宣誓を告ぐるときは同法の規定に從い無罪とするとせられている。[11]

この新法に、告ぐるものは罪をゆるす、とせるところに、われわれは、いかに當局がラッダイトの探索に手を、やいたかをうかがうことができよう。

さらに、同年七月末には、かねてヨークシャーの奉行が請求していた法令（Bill）が通過している。これは、つぎ　權限　奉行にあたえた、一、武器があることの宣誓證言を待つことなくして、武器がある疑があるいかなる場所をも搜索する權限、二、不穩な武器の引き渡しを所有者に請求する權限、三、日中の擾騷的集會、夜間の十人以上の疑わしき集會を前述の The Riot Act の形式によらずして解散せしむる權限。[12]

ただし、これらの新法令も、ほとんど、なんらの效果をあげなかつたとハモンドは記している。[13]

つぎに、軍隊の派遣であるが、これは結局においては、ラッダイトの鎭壓に效力がなかつたとはいうを得ないであろうが、われわれは、なほ、つぎのごとき事情を看過してはならないであろう。それは、軍隊が民衆の怨を買ひ、その割に效果があがらなかつたという事實である。たとえば、バイロン卿は、一七一二年二月一七日上院(The House of Lords)に於ける機械法(Frame-Work Bill)の第二讀會(The Second Reading)に際してかれがおこなつた演說の中で『都市と州とは軍の大分遣隊の重荷を背負はされていた。警官は活動していた。奉行は會合した。しかし、軍・官のすべての運動の結果は――無であつた。』といつている。バイロン卿はノッチンガム州で見たところを述べたのであろうが、ヨークシャーでは大に事情をことにすると、せねばならぬ理由は見出しがたい。げんにベンオビルの回想錄によれば、軍隊の宿泊所となつた旗亭の主人はつぎのごとくこぼしている。

――ジョン、どうだい、家いつぱいの兵士で？

――ああ、ベン、それをいわないでください、とかれはさけんだ。これがもう一月つづけば、わたくしは破產でさあ。こちらでも『ジョン！』あちらでも『亭主！』朝から晚まで、いや、つぎの火曜日の朝までですよ。そして、のみしろを拂うことはかれらの一番おもわないことです。……

――しかし、ジョン、かれらが拂いをしないなら飲まさなくてもよいにきまつているではないか。

――ベン、法律は法律、家に一ぱい兵士が居ては話は別でさあ、それにどうにもなりませんわい。娘も、傭人も、女房までもみんなでよつてたかつて、わたくしを破產させるんです。かれらの頭はみんな兵士達の頭といつしよにまわるんです。こんなことつて、りつぱな人の家ではいままでにけつして見られなかつたところですよ。

――しかし、指揮官の將校はどうなんだい？

――なんですつて、かれですつて！　あいつに苦情をいうのは、鬼といつしよになつて地獄に正義をもとめに行くようなものですわい。あいつは、あるときは、わたくしをあざわらい、あるときは、わたくしにどくづきます。そして、あげくのはてに、わたくしが、ふみつけられた蟲がときにするように、はらをたてますと、あいつはすぐ、とつくりをあらいに行け、行つて娘をなぐきみによこせ、と命じます。それに一番わるいことには、娘が行きたがつています。これで一體どうなることですか、わたくしの力にはおえません。[14]……

それは、ひとり、旗亭の主人を憤激せしめただけではなかつた。ベンの回想錄によれば、たとへば、ハツダースフイールド地方には、二月の工場襲撃がおこるとすぐ軍隊が派遣せられて來たが、その狀況はつぎのごとくであつた。

それから、兵士達がやつて來た。スコット・グレイ (Scots Grey) と第二龍騎兵隊 (The Second Dragoon Guard) であつた。かれらは、市のいろいろの宿屋に分宿した。間もなくかれらの行動について醜聞が生じた。酒はのむ、人を惡罵はする、良家の子女には恐慌をまきおこし、市のみだらな女達と白晝街頭をよろめきあるき、みだらな歌はうたう、市のもつとも莊重で、かつ威嚴のある奉行にすらすこしの尊敬もはらわず、ただかれら自身の將校達にだけ、それも當番のときか巡察のときだけ、神妙にする、といつたぐあい。かれらは市にとつては惡の見本であり、非難の的であつた。そして、なんの役にも立たなかつた。[16]

そして、かれらがいかにものの用に立たなかつたかは、ベンのつぎの回想にもよくこれをうかがうことができるであろう。

われわれは騎馬の巡察隊に出會つた。かれらはわれわれを誰何した。われわれはいづれもちがつたうそをついた。しかし、かれらはわれわれを止める理由をもたなかつた。そして、かれらは馬をゆるゆるとうたせ夜の闇の中を兩側をすかし見ながら、野原のむこうに行つてしまつた。わたくしはこれらの騎馬兵がすこしでも役に立つたことを一度も知らない。かれらのだらしないやりかたでは、かれらはあまり邪魔にはならなかつた。うまくごまかしたものたちは、かれらをやりすごして、しやあしやあとしてあるいて行つた。かれらに顔をあわせることのできぬものたちは、かれらをさけるだけのことであつた。かれらをさけるのは夜でも晝でも易々たることであつた。といふのは、石垣が身をかくすのにあつらえむきであつたからである。どうひいき目にみても、騎兵にとつては困難な國であつた。[16]

なほ、ここに、一言しておくが、ハツダースフィールド地區のマジストレートのラードクリツフは兵士達を各工場に分駐してもらいたいと主張したのであるが、ヨークシャ派遣軍の長官のグレイ將軍 (General Grey) は兵力不足を理由にこれを拒否し、ラードクリツフはグレイ將軍の職務怠慢を非難し、兩者の關係は良好ではなかつた。[17] かくて、當局の中に恐慌を生じ、たがいに惡罵非難を交換しはじめ、奉行は軍隊を無用と考え、軍隊は奉行は無能であり、緩漫であると公言した。[18]

いずれにしても、軍隊があまり役にたたなかつたことにはかわりはない。しかも、他方、地方の防衛組織としては監視法 (The Watch and Ward Act) なるものが、あつたのであるがこれによる防衛隊員の中に叛徒に氣脈を通ずるものがすくなくなかつた。フランシス・ウツド卿は、叛徒の方がむしろ多い、といつていた。そのような事

情で、この法規の強化は、かえつて、もつともにくむべき徒に武器を供給することになるとして、その停止を要求する聲も出ている。それに、多數の都市は、財政面よりその負擔に堪えざるをもつて、その停止を請願している。その請願はききとどけられるにはいたらなかつたけれども、事實上、勝手に停止せられていたらしい。それは六月一七日、フランシス・ウツド卿が、ハツダースフイールドならびにカークストール（Kirkstall）近傍の區域内で、それが實行できたのは、ただ、二ケ所にすぎない、と報告していることによつても、うかがいうる。ウエークフイールドの州會では三月一四日に、この法の實行に代えて、自警團（Voluntary Association）を結成することを決議している。[19] また、ハツダースフイールでは、警察長官（Head Constable）が、十歳以上五十歳以下のすべての男子によびかけ、まずしきものには賃銀をあたへ、これを特別警官（Special constables）に編入したということをベン・オ・ビルはその回想録の中にしるしている。[20]

軍隊はラッダイトの暴行を防止できず、奉行は犯人を逮捕することができず、かくては民心は、安定せず、脅威はつのるばかりである。そこで、犯人を告ぐるものに賞金が提供せられるにいたつたのである。ローフオルド工場襲擊に關係したものの發見に賞金が提供せられることになり、またホルスフオールの暗殺者を法廷に知らせたものには、直接の下手人以外なら何人にも三、〇〇〇ポンドという大金が提供せられることになつた、とベンはしるしている。[21] ただし、ハモンドによれば、一八一二年の春から夏にかけて、二、〇〇〇ポンドの賞金の提供は何らの應答をもたらすにいたらなかつた。[22]

しかし、賞金とさきの告ぐるものは罪を免ずる新令とは、共犯者に對しては大なる魅力であつたにちがいない。

さきに引いたところよりしてもうかがい得るとほり、たとえばスオーデン、ウイリアム・ホール、ジョセフ・ドレーク等の證言を見るにいたつている。とくに、ベンは、その回想録の中に、ベンジヤミン、オーカー(Benjamin Walker)の、さらに戀のさかうらみを加えた陰險姦惡なうらぎりのいきさつを詳細に記述しているが、それはここには省略に附する。

最後に、わたくしは政府が犯人檢擧のためにスパイ政策を用いたことをあげなければならない。ラツダイトが誓約により秘密を守り、民衆がラツダイトに好意をもつてこれをかばい、ために犯人を檢擧すること困難なるよりして、當局はスパイを用いて犯人の檢擧に成績をあげることに努めた。これは、さきに引いたマクドナルド達の事例によりてうかがい得るところであるから、あらためて詳說することをひかえ、その詳細はハモンドの著[23]にゆずることにする。

(1) Proceedings at York Special Commission, pp. vii—viii.
(2) Hammond, *ibid.* pp. 308—309.
(3) Proceedings at York Special Commission, p. 190. etc.
(4) *Ibid.* p. 79.
(5) C. Brontë, *ibid.* II. xxii. p. 69.
(6) Proceedings at York Special Commission, p. 16.
(7) "……money was collected from men of other trades, notably, bricklayers, masons, spinners, weavers, and colliers, as well as from the soldiers in some of the regiments stationed at provincial centres; and such evidence as we have found points

rather to a widespread secret oath-bound conspiracy, not of the men of any one trade, but of wage-earners of all kinds. (Sidney and Beatrice Webb, The History of Trade Unionism (Revised edition, extended to 1920) p. 88.)

(8) Sykes, *ibid.* p. 101.

註ト參照

(9) Proceedings at York Special Commission, p. X.

(10) *Ibid.* pp. 3—6. p. 105.

(11) Hammond, *ibid.* pp. 318—319.

(12) *Ibid.* p. 319.

(13) Sykes, *ibid.* p. 79.

(14) *Ibid.* pp. 53—54.

(15) *Ibid.* p. 89.

(16) Hammond, *ibid.* pp. 302—303.

(17) *Ibid.* p. 310.

(18) Hammond, *ibid.* p. 311.

(19) Sykes, *ibid.* p. 54.

(20) *Ibid.* pp.163—164.

(21) Hammond, *ibid.* p. 310.

(22) *Ibid.* p. 312.

(23)

終　五

煩

かく、ラッダイトは社會に大混亂をまきおこし、當局をして憂慮せしめることはなはだしいものが、あつたのであるが、それでは、それはいかにして鎭靜に歸し、その終熄を見るにいたつたであらうか。

それについて、まず、考えられねばならぬのは、なんといつても、やはり、當局の努力であらう。なるほど上述のいろいろの當局の施策はラッダイトの勢の前にあまり有效適切であつたように見えない。しかし、それにもかかはらず、それらはやはりラッダイトにとつては大きな壓力であつたにはちがいないといわねばならないであろう。たとえば、軍隊の派遣を考えてみてもそうである。なるほど軍隊の效力はあまりなかつたようにいわれている。しかし、それでも、それがようやく、大規模な運動を不自由にし、不活潑にしたであろうことは、うたがいをさしはさむ餘地のないところでなければなるまい。かくて、たとえば、リーヅやハッダースフイールドの地區では一八一二年の四月の半ばごろには、すでに、組織的な機械破壞運動はとまつたといわれている。[1]

つぎに、われわれは、――これはあまり指摘せられていないところのようであるが――民心の離反、すくなくとも、民衆の支持または好意、同情がラッダイトを去つた、といつていいすぎであれば、すくなくとも、それが減退したことをあげてもよいのではないかとおもうがどうであろうか。けだし、組織的な機械破壞運動は止まつても、事態はかならずしも鎭靜に歸したのではなくて、さきに述べたところよりしても容易に理解しうるところとおもうのであるが、製造業者達の暗殺行爲や、または、ラッダイトの末輩かあるいは、ラッダイトに名をかる單なる泥棒の押込みなどは、その後も跡をたつたわけではなかつたのである。しかるに、それらのことは、ようやく人心をしてラッダイトより離れしむるに役立つにいたつているにすぎなかつたであろう。そして、ラッダイトの運動における民衆の支持、同情の役割をおもうとき、それの喪失がこの運動の盛衰消長におよぼす影響のい

かなるものであり、いかに大であるかは、けだし、おもひなかばにすぎるものがなければならないであろう。たとえば、ベンはホルスフォールの凶報をきいた夜のことをつぎのごとく回想している。

『わたくしはその夜一睡もできなかつた。ホルスフォールが射殺された！　一人の男が壁にかくれた暗殺者の兇彈にたおれた！……男のフェアプレー・ヒューマニチーの衝動がわたくしの身内にわきあがり、血なまぐさい行爲に恥を知れときけんだ』[2]

また、ホルスフォール暗殺犯人ジョージ・メラーがひそかに心をよせていた少女メリー（Mary）も、かれに『あなたの手には血がついています。ジョージ・メラー。わたくしの手は二度とあなたの手をにぎらないでしよう。』といつている。[3]

かくて、ベンは、ホルスフォール暗殺の影響についてつぎのごとくいつている。

『ホルスフォールの死はラッヅの豫期したところとは正反對の效果をもつた。それは親方達の屈服をもたらさなかつた。反對にそれはかれらを硬化させかれらを團結せしめた。それはラッダイトを呼舞しなかつた。むしろ、かれらは自分達の側の行きすぎに愕然とした。』[4] そして得たものは當局の彈壓の一層の强化であつた。[5]

かくのごとくして、さしも、もえさかつていたラッダイトの勢も、ようやく、下火になつてゆくのであるが、われわれの、ここで、さらに、特筆大書せねばならないのは、一八一二年六月一八日における海上封鎖令の撤廢である。われわれは、さきに、ラッダイトの發生の原因をたづねたとき、この海上封鎖令の役割のきわめて大な

ることを指摘しておいたのであるが、それの施行が發生原因としての役割の大であるということは、やがて、それの撤廢がその終熄の原因としての役割の大であることを意味せねばならぬといつてさしつかえあるまい。そして、それは實際そうであつたのである。それがいかにそうあつたかは、たとえば、つぎに引くところを讀めばおもいなかばにすぎるものがあるであろう。

すなわち、ペンはそれについてつぎのごとくしるしている。

『ひとはなんといわうとも、ローフォールドの襲擊とホルスフォールの死亡はむだではなかつた。この二つの事件は議會鬪士達よりも、ブローハム氏(Mr. Brougham)よりも、訴うるところが一層つよかつた。この二つの事件は抗辯をゆるさぬ論議であつた。その年の六月、より正確にいえば一八日海上封鎖令は撤廢せられた。そして、われわれの谷間、およびウエストライディングの全地域は、たちまち、蘇生した産業の動きで多忙になつた。それは、あたかも、長い夢魘のおもい壓迫から解放せられて、自由に呼吸するようなものであつた。市場は仙女にふれられたかのように、一瞬にして活氣づいた。人々はあわただしく來往して、たがいに握手し、顏にも眼にも喜色がみなぎつていた。なまけていた機械は音をたてはじめた。道路は昔のように、ふたたび荷物を滿載して出發し、からになつて歸來する大きな車の往來で、にぎやかになつた。運河はたくさんの品物をはこぶために自由に使用されだした。商品の生産は間にあわないくらいであつた。港灣は再開された。そして世界中いたるところの國民達が商品をもとめてさけんでいるかのごとくであつた。それは凍結し、せかれていた、商業という水が、急激な熱度によつて、解けてどつと奔流するかのごとくであつた。教會の鐘はライディング中になりひびいて、この吉報をつたえた。われわれの地方の製造業者達は『櫻の木』やその他の多くの宿屋で、一大饗宴を開いた。そして、一生の中ではじめでありをわりであつたが、父が酒によつぱらつたのを見た。父はいく日もいく日も母のこわい顏のまえに平身低頭した。

われわれもこのかがやかしい陽光の一大放射に浴した。われわれの家は滯貨でいつぱいで、母は、ねずみにくわれてしまうほ

かはない、といいきつたものである。それが、いまや、右から左に賣れた。それでも、まだ、もつと、というけびがつづいた。われわれはスラップ（Thrupp）の妻のように朝から晩までてんてこまいをした。わたくしは家の機械や船の索綱や地方の仕事から身體のぬけ出る間がなかつた。[6]』

われわれは、さらに、シャロッテ・ブロンテが『シャーリー』の中でつぎのごとく述べているのを引くこともできる。

『一八一二年六月一八日、海上封鎖令が撤廢せられ、封鎖されていた港灣が解放せられた。みなさんはよく御存知でしょう――みなさんの中で覺えていられるほどの御年配のかたがたは――あなたがたは、そのをり、あなたがたの歡呼でヨークシャーとランカシャーをゆりうごかされました。鐘つきはブライアーフィールドの鐘樓の鐘をつきこわした。それはこの日にはつきづきしいからぬことであつた。商工業協會（The Association of Merchants and Manufacturers）はスチルブローで會食をした。そして、一人のこらず、その妻がけつして二度と見ることを欲しないようなまで、家に歸つて行つた。リバプールはうごきだし、葦の中で雷におこされた河馬のように暴嵐を吹いた。アメリカの商人の中には卒中のおそれを感じて刺胳してもらつたものもあつた。みんな、賢人のように、繁榮のこの最初の刹那、投機におしよせ、また、他日みづからをその中に沒するかも知れない、いろいろの困難を掘り下げる用意をした。何年間もの滯貨は、いまやたちまちにして、一瞬の間に、一掃された。倉庫はからになり、船舶は滿載した。仕事はたくさんになり、賃銀はあがつた。好景氣到來の觀を呈した。これらのみこみはあてにならぬかも知れない。しかし、それらはかがやかしいものであつた――あるものにとつては、それは眞實でさえあつた。この時期に、あの六月のたつた一ヶ月に、多くの堅固な財産ができあがつた。[7]』

かく、景氣が出て、製造工業が活潑となれば、當然、人手が要るようになる、賃銀はあがる、そうすれば、勞働者のくらしむきもよくなる。ラッダイトも下火になるのに不思議はあるまい。しかし、この景氣は、一時的のもので、大陸諸國の戰後の疲弊は、やがて、その需要を減退せしめ、他方產業革命が進行のピッチをあげるにおよんで、また勞働者のくらしむきは惡化し、機械の破壞運動を見ることとなる。しかし、それは機械破壞運動ではあるがラッダイト運動ではないこと、なほラッダイト以前の機械破壞運動がラッダイト運動でないとかわるところはない。ラッダイトは機械破壞を行つたが、機械破壞を行つたものかならずしもラッダイトではない。かくて、ヨークシャーのラッダイトについていえば、その終熄は一八一二年とせねばならないであろう。いな、くわしくいえば、その最高潮はその年の四月で六月以後は餘韻とみることができるのではないであろうか。

(1) Hammond, *ibid.* p. 309.
(2) Sykes, *ibid.* p. 158.
(3) *Ibid.* p. 162.
(4) *Ibid.* p. 163.
(5) *Ibid.* p. 164.
(6) *Ibid.* pp. 172—173.
(7) C. Bronte, *ibid.* II. p. 457.

六　批　判

以上わたくしはヨークシャー・ラッダイトの發生より終熄にいたるまでについて若干の考察をこころみたので

あるが、いまこれをむすぶにあたつて、すこしく、これに對する批判について、うかがつてみよう。

おもうに社會規範の表現たる法律を蹂躙し、所有權を侵害し、生命に危害を加えるごときラッダイトの所業が正であり善でありうる道理はないであろう。それが不正であり、不善であることは、あまりにも明々白々、いささかの疑義をさしはさむべき餘地もないであろう。したがつて、その所業よりみれば、それはほとんどわざわざこれを批判するまでもあるまいとおもわれる。

しかしながら、行爲と動機はこれを區別して考えることができよう。行爲はわるいが動機はよいということもあれば、また、その逆の場合もめずらしいことではないであろう。そこで、ラッダイトの所業はその非なることというまでもないこと右のごとくであるとしても、かれらをして、かかる所業をおこなはしめたる動機たる思想が檢討の對象となるであろう。

しかし、この場合、革命思想はここでふれるべくあまりに大きすぎる。それに、それにはおのずから、それがとりあつかわれるべき適當の場所がある。それに、ラッダイトをラッダイトたらしむる特徴のもつとも大なるものの一つはその機械への叛逆、その破壞において見られる。だから、われわれはここでは問題をこの點に限定するのが適當であるとおもはざるを得ない。

ラッダイトの機械に對する反抗の理念は、すでに見たるところよりしてあきらかなるごとく、要するに、機械は勞働に對する需要を減退せしめることにより、勞働者を不幸におとしいれるものである、だから、これを排擊せねばならぬ、というにある。

それではそれは、はたして、ただしいかどうか。それに對する批判はいかにあるであろうか。これに對して、

すでに、當時これと對應的な考も行はれてゐたのであつた。われわれはその典型的なものとしてつぎのごときものをあげることができよう。

『およそ商品はその價格が安ければ安いほどそれに對する需要が增し、買手はその商品がもつとも安く賣られる市場に行くであろう。そして、だから、價格を安くするのに役立つものは、なんでもみな、需要を增し、そのような價格の安い市場を、地方的な事情のために商品をそのように安い價格で賣ることのできない他のすべての市場よりも、有利ならしめる。需要の增すところでは、やとわれる人手の數も亦增すであろう。しかるに、機械の使用ほど製品の價格を安くするのに役立つたものは、いまだかつてない。機械によれば、同一の仕事が、ただに、よりすくない時間に、よりすくない人手で、なされるばかりでなく、さらに、すべての作業が肉體の力でなされねばならないときよりも、よりわかく、より體格の强くない人達によつてなされることが可能となる。そこで、いまや、（以前の場合のやうに）まつたく夫や父のはたらきにのみたよらないで——夫や父にもその力を用いて充分の賃銀を得る職場がなおたくさんある——一家の全員がその家をささえることに貢獻することができることになる。そうすると、もし、不滿のやからの努力が機械の排擊に成功することができたとすれば、その結果はどうなるか？　妻や子供は解雇せられるであろう。夫や父は、まつたく、自分達の勞働だけでかれらをやしなつてゆかねばならない。製品の價格はあがるであろう。買手は、機械の使用が奬勵される市場に行つてしまうであろう。商業はすたれるであろう。製造業者はしだいにその職人を解雇したり、かれらの賃銀をひき下げたりするであろう。他方、かれらの家族はますます重荷となるであろう。そして、ついに貧乏と不幸のみがさかえるであろう。』[1]

また、トムソン男爵はヨーク城におけるラツダイトの公判廷において、

『われわれの製造業の存在のよつてきたるところは、おそらく、そして、その卓越・繁榮な狀態のよつてきたるところは、たしかに、われわれの機械の優秀なことからである。およそ生產費を減するところのものはみな消費を、そして內外の市場における

その商品に對する需要を增大せしめる。機械の使用が全然廢止せられるならば、機械のおくり出される他の國がわれわれよりも安く賣ることができるようになるだけそれだけ、製造の中止がすぐにおこるであろう。[2]』

と論じ、また、パーク氏も論じてつぎのごとくいう。

『もしも、カートライト氏の工場襲撃が成功していたとすれば、多數の家族はそのためにパンが得られなくなつてゐたにちがいない。すくなくとも、氏があたらしい工場を建設することができたまでの相當長い間は。だから、それは、おそるべき困窮をもたらしたにちがいない。[3]』

かくて、當時の識者達は『機械は有害どころか、勞働者にとつても、また、社會全般にとつても有益であり』[4]ラッダイトの右の考えよりも『もつと荒唐無稽な、根據のない議論を役立たすことは不可能であり』[5]その『勞働者自身にとつて有利なことはもしかれらに事物を理解するための忍耐さえあつたならば、かれらに機械の偉大な效用を確信せしめたことであろう。しかるに、不幸にも、かれらはことなつた方向をとり、刑罰がともないはしないかということばかりでなく、さらに、機械を使用している工場の破壞がそこにはたらいているすべての人にもたらすにちがいない絶對的な貧乏、不幸、および困窮をも、考慮するために、たちどまらうとはしなかつた。もしもかれらがその考慮をしたならば、わたくしはおもう、道德的の義務でなくとも、世の常の愼重でも、かれらがその所業をなすことを、とめたことであろう、と。』と斷じている。[6]さらに、かりに機械の發明行使の結果ある商品の生產において、勞働力の需要が減少するとしても、その商品の價格が安くなれば、その生產が盛となる。しかるに一つの商品の生產が盛となればそれはその商品の生產が盛となるだけでは終らない。そこにはおのずから關聯產業がおこり、その毀盛が見られる。かくて勞働力に對する需要は增大し、それは、さきの機械の發明に

よつて生じた勞働力に對する需要の減少をおぎなつてあまりあるであろう、という考え方もおこなわれた。たとえばつぎのごとくである。

『あたらしい機械の發明がもたらすもつともいちじるしい富の例は有益な書物を非常に廉價につくる機械のそれである。一四五〇年より以前にあつては、筆耕は高價な書物の寫字をして、くるしい生涯を送つた。それは非常に多數の家族を使役し、これを扶養した。印刷術が發明せられると、たちまち、これらの筆耕はみな職を失つた。たしかに困窮の時期があつた。しかし、書物の價格が下つたので書物がひろく賣れ、いくばくもなくして、この產業にやとわれる人、すなわち、植字工・印版師・製紙家・校正者・製本屋・書肆・呼賣子・運送人の數が非常に增大した。その數はむかしの筆耕の數よりも百倍も多いといつてもあやまりではないはずである。筆寫で生活した千の家族のかわりに今日では一〇萬の家族が印刷術で生活している。[7]』

以上の批判は、なるほど、一應もつともにおもわれる。マントウのごときもその後の『長い經驗がそれを肯定した論證』(Ce raisonnement, qu'une longue expérience a justifié)[8] といつているくらいである。しかしながら、さらに考えてみれば機械のために成年勞働者の力や、その從來の經驗、熟練が不要となり、これにかわつて女子幼兒が登場することは、かれら成年勞働者にとつては慨嘆にたえぬところでなければならぬということも、また、むりからぬことをわすれてはならないであろう。もつとも、この場合、機械は物資を豐富廉價にすることによつて社會一般に貢獻する、しかるに一部勞働者がそれが自分等にとつては不利益だという理由からこれを排擊するというのは、かれらの利己主義以外のなにものでもない、という非難がなりたちうるでもあろう。しかし、また、利己主義といへば、さきの、ラッダイトの機械に反抗する論理を否定する側の論證にも利己主義は見られる。けだ

し、それにおいて、自國における機械の使用が廢止せられることは他國を利することになるというのは、國際的な規模における利己主義にほかならないと見うるであろうからである。そして、ここで、わたくしは、かかる利己主義がダンピング、爲替相場の引き下げ、輸入關稅の引き上げ、等の競爭の激化を經てブロック經濟に進ましめ、ついに今次の大戰を勃發せしめるにいたつたと見うることを想起せざるを得ないものである。

しかし、それはともかく、あらたなる關聯せる產業の勃興毀盛が新なる勞働に對する需要を增大せしむるという論議に對しては、つぎの事情を考慮に入れることをわすれてはならないであろう。すなわち、それにおいては、一般的に見て、從來の勞働者の經驗、熟練の評價がいつそうひくくなる公算の大なること、一の生產部門の職場を失つたものが容易に他の職場に適應する保證が、かならずしも、あるとはいえぬこと、たとえば筆耕が鑛夫となることは、困難であろう、さらに、一の商品生產における機械の發明より生ずる勞働力に對する需要の減少と、その關聯產業の勃興毀盛によつて生ずる勞働力に對す雷要の增大の間における、時間的ズレの存在の可能性等がそれである。さらに、機械による勞働における經驗熟練の價値の減殺は勞働力の供給の增大・(產業豫備軍の增大)、その代替性の容易さがもたらすであろう勞働者の位置の不安定化、その立場の弱體化の傾向も考えられうるであろう。

しかしながら、それにしてもラッダイトの機械への叛逆が機械それ自體とその利用形態、あるひは、機械それ自身とその所有關係を混同し、その間の區別を見失つた點は認識不足のそしりをまぬがれないであろう。[9] (完)

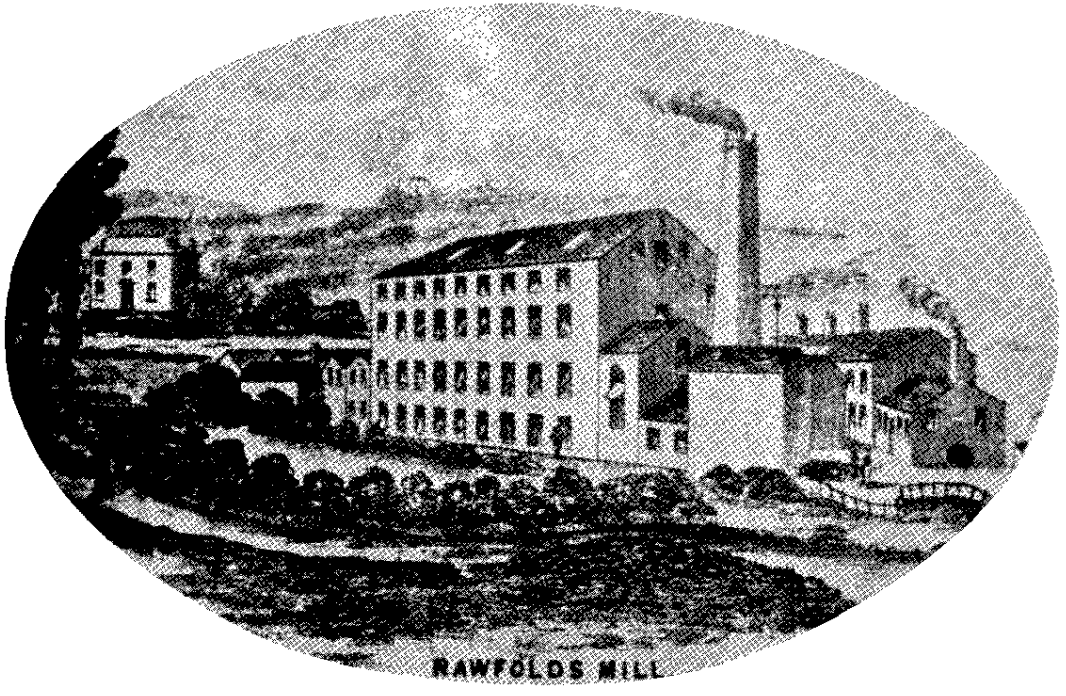
(1) Proceedings at York Special Commission, p. xii.

(2) *Ibid.* p. 2.

(3) *Ibid.* p. 135.
(4) *Ibid.* p. xii.
(5) *Ibid.* p. 2.
(6) *Ibid.* p. 135.
(7) Th. Lebrun, Livre de Lecture Courante contenant La Plupart des Notions Utiles qui sont a la portée des enfants de 8 à 12 ans, Paris, 1873. Seconde Partie, pp. 81—82.
(8) Mantoux, *ibid.* p. 416.
(9) Karl Marx, Das Kapital, I, 10. Auflage, S. 394.

一九五一—三—二八

本稿は文部省科學研究費による『ラッダイトの研究』の成果の一部である。記して感謝の意を表する。



THE ORIGINAL OF "HOLLOWS MILL."

From "Shirley" by Charlotte Brontë
(Thornton Edition Vol. I, to face P. 36.)